

温泉列島再発見

温泉教授 松田 忠徳

人と自然に優しい宿

都会の人々にとって、たとえ一泊二泊であっても、温泉は「現代の湯治場」に違いない。

この時代、質のいい温泉と地場の食材を使った料理は最も求められるものだろうが、感動や再発見のない

ような温泉場に、都会人の五感はやすくは反応しないだろう。地域の生き生きとした姿が伝わってくる温泉場を訪ねたい。

湯原温泉 (岡山県)



共同露天風呂の「砂湯」。湯原ダムの下にあり、無料入浴できる

中国山地の懐に抱かれた蒜山(ひるぜん)高原に源を発し、南流して岡山市で児島湾に注ぐ旭川。その上流域の山あいには、小・中規模の旅館二十軒ほどから成る湯原温泉(岡山県真庭市)が湯煙を上げる。その多くが地場資本で、それだけに結束力が強い。

このような立地の温泉場こそ、日本人の琴線にふれる癒やしの原風景なのである。バブル経済の恩恵に浴さなかつた分、それほど疲弊することなかった。推定湧出量(ゆうしゅつりょう)毎分六千リットルがすべて自噴泉だというから驚きだ。有名温泉地が生命線である温泉すらもバブル(泡)化してしまったところが少なくないことを考えると、つい湯原の今後に多大な期待をかけてしまいたくなる。

「プチホテルゆばらリゾート」の館主で湯原町旅館協同組合理事長と湯原観光協会長を兼務する古林伸美

廃油を送迎車の燃料に



プチホテルゆばらリゾートのリムジンと古林さん。天ぷら油を再生した燃料で走る

さん運転の英国製リムジン(通称ロンドンタクシー)で、エコツアーに出る。古林さんは持ち前の明るく前向きなキャラで、湯原再生のための仕掛けを矢継ぎ早に打ち出してきた。

「温泉場で生活しているのに湯原温泉のことを知らない」ことに気づいて始めた「温泉指南役」制度。湯原温泉病院と提携しての「湯けむりドック」。川上俊爾院長は「温泉でリラックサして、心安らかに自分の健康と向き合う」宿泊プ

ラン付き人間ドックを、積極的に支援している。

古林さんと川上院長の話を通じて、意思の疎通が実にうまくいっている。二人の触媒は湯原温泉に対する愛情である。

「現代の湯治場につなげるために、私たちが率先して環境に優しくなくてはならない」ことに気づきました。湯原は都会の人々を癒やす場です。温泉は自然の一部ですから、自然に優しくなくして、お客さんにも優しくはできないと――」

湯原地区の宿や一般家庭

の天ぷら油を回収して、川の汚染を防ぐ一方で、天ぷら油精製燃料を再利用し、現在、宿の送迎車など、約二十台のバイオディーゼルの車を走らせている。

「二〇〇八年は七万リットルのバイオディーゼル燃料を作り、CO₂を百九十ト削減した計算になります」と古林さんは胸を張る。

- ▽交通 JR姫新線中国勝山駅から中鉄バス蒜山高原行きで約三十五分、湯原温泉下車
- ▽温泉 アルカリ性単純温泉、三六―五二度。共同浴場は湯原ふれあい交流センター(湯本温泉館) ☎0867・622・2039、午前十時―午後十時半受け付け、無休、入浴料六百円。砂湯は一月十九―二十二日は大掃除で入浴不可(天候により変更も)
- ▽問い合わせ 湯原観光協会 ☎0867・622・2526。プチホテルゆばらリゾート(部屋数全室、☎0867・622・2600、一泊二食一万三千円から)



人間のことを、考える。環境のことを、もっと考える。

戸田建設

平安時代、湯原周辺でたたら製鉄が行われていて、過酷な仕事を終えた鉄山師がここで疲れを癒やしたのが始まりだともいう。混浴だが、これほど整備された露天風呂を無料で開放し続ける湯原の人々のホスピタリティーには頭が下がる。優しさは時代のキーワードである。(札幌国際大学教授)